

超人スポーツが提起する新しいスポーツの地平

坂 なつこ 一橋大学大学院社会学研究科教授

スポーツをめぐる動きは、多様性を増している。オリンピック・パラリンピックやワールドカップなど、スポーツイベントが普及し、巨大化するにつれて、様々な問題点が浮き彫りにされる一方、スポーツそのものを問い直す動きも広がりを見せている。本稿では、その中から、2015年に設立された超人スポーツ協会に着目し、スポーツと身体をめぐる問題について考える契機としたい。

1. 近代スポーツと身体

『近代スポーツのミッションは終わったかー身体・メディア・世界』という象徴的なタイトルの鼎談において、論者のひとりである稲垣は、「近代スポーツは、もはや、脱出不可能な隘路に入り込んでしまっている」と述べる¹⁾。3人の論者は、その課題意識を出発点として、近代的身体観の〈外〉に出て、新しい身体観の理論的根拠を探ろうとするものだが、稲垣は、その出発点を、近代スポーツの基本原則の一つである競争原理による、アスリートの身体の「侵食」であると断じている。近代スポーツのアスリートは、科学的トレーニングのもとで肉体改造がなされ、あたかもサイボーグのように「機械化」されていると述べる。つまり、身体が「本来あるべき姿」からかけ離れてしまったのである。

田中は、「既存のスポーツ実践において、人は、スポーツに適合するように変わることが求められる」と指摘する²⁾。身体は成形され、特殊な経験や知識が蓄積されてはじめて、アスリートはそのスポーツに参加することができる。目標に向けての長時間の反復練習や負荷が大きいトレーニングを計画的に忍耐強く続けることができるメンタリティもまた必須であり、P. ブルデューは、そのような技術や知識、メンタリティの獲得あるいはそ

れへの理解が、スポーツ界に参入する資本であることを指摘した³⁾。「スポーツする身体」とはそれらの努力や、知識、経験の結晶といえるのであり、さらに、その達成は人間性の証とみなされるのである。ブルデューが示したのは、そのようにして「創り上げられた身体」が、スポーツにおいては、あたかも生来の「自然な身体」とみなされるようになるということであった。そのため、スポーツにおける「自然な身体」とは幻想にすぎない。だが、稲垣のような批判はよくみられるものである。特に、勝利至上主義や記録主義の徹底は、ドーピングや過度なトレーニング等を促す。プロテインなどの補助食品やトレーニング機の多用、あるいは道具等の高度化により、アスリートの身体は「加工」され、「自然な身体」から離れていくと考えられるのである。

そういった批判は、スポーツにとって重要なのは成績や記録だけではないという考え方によっても支えられている。S. B. ドゥルーは、ロバート・サイモンを引用して、「我々は必要であれば 100 ヤードを 3 秒で『走る』ロボットや、ゴルフで 500 ヤードの飛距離を出すロボットを開発できよう。しかしわれわれが求めているのは、単に優れた成績だけではない。われわれはそれに加えて、スポーツ競技が人間のテストであることを求めている」のであり、競技の目標は競技の成績や勝敗だけではないという主張を支持する⁴⁾。ここでは、テクノロジーも、「自然な身体」の対抗物として取り沙汰される。ドゥルーは、観客がみたいのは人間の競争であって、ロボットのそれではないと述べるのである。だが、テクノロジーの発達により、飛躍的に向上しているスポーツ環境や道具は、アスリートの身体やスポーツそのものにも影響を与えており、欠くことのできないものである。

渡は、スポーツに関わるテクノロジーについて、

スポーツの戦術やゲームのあり方そのものを変化させるものではないケースを外在的かかわり、人工物の存在が当該スポーツを構成する不可欠な要素であり、その変化が当該スポーツにとって根本的な変化をもたらすケースを内在的関わりと呼ぶ。前者には、シューズやユニフォーム、ボールなどがあげられ、後者には、棒高跳におけるボールの材質、モータースポーツ、ゴルフなどがあげられている⁵⁾。しかし、現在のスポーツ環境において、テクノロジーの関わりが内在的か外在的かを分けることは非常に難しいといえる。例えば、FIFAワールドカップの公式球の性能は、試合結果に影響を与えるだけでなく、選手の技術にも変化を要求する⁶⁾。渡自身も、現代のスポーツは、「身体—道具（人工物）—ルール（制度）—時空間（自然環境）などの要因間の相互作用、相互協調の結果」であると述べている⁷⁾。渡は、陸上競技の記録の推移や、競泳用水着とレギュレーション、ゴルフのドライバーによる飛距離の変遷を示して、「科学や技術、肉体との複雑な混交体」としてスポーツが存在していると指摘するのである。そのため、アスリートの身体が、単に道具や科学技術（生理学なども含めた）の発展によって「侵食」されたり「改造」されたりととらえるのではなく、スポーツそれ自体が人工物との協働によって成り立っているとみる⁸⁾。そして、そのことが可視的に示されるのが、パラリンピック種目に代表される障がい者スポーツであるが、渡は、障がい者スポーツに特徴的なのではなく、その協働こそが近代スポーツの可能性であると指摘するのである。

だが、渡が述べるように、スポーツが自然と人工物の混交物であるとするならば、「スポーツの身体」とはどのような身体になるのか、その境界線はどのように定めることができるのだろうか。実際に、パラリンピックの選手がオリンピックに出場するためには、障がいを補助する道具（義足、車いすなど）が、競技力を向上させないという科学的証明が必要となる。2016年8月のリオオリンピックへの出場を希望していた、ドイツの走り幅跳び選手M. レームは、その証明に時間がかかるこ

と、そして政治的な事情を理由として、断念した⁹⁾。国際陸上連盟が求めたカーボン製の義足には優位性がないということを証明する必要があった。科学的に証明される必要があったのは、レーム選手の義足が「自然な身体」という規範＝基準から逸脱していない、ということであり、基準とされる「自然な身体」は健常者の身体なのである¹⁰⁾。

スポーツでは、「目指される身体」は「自然な身体」であり、健常者の身体である。しかし、繰り返しになるが、「自然な身体」とはどのような身体なのか。近代スポーツの隘路とは、むしろ、幻想とわかっていてもそのような身体観が保持されていることとあってよいのではないだろうか¹¹⁾。

近代スポーツがつくりあげてきた「自然な身体」という身体観を等閑視する動きの一つとして捉えられる「超人スポーツ」は、パワースーツや器具を着用することによって、身体的差異や、スポーツの経験などの有無にかかわらず、競技を行うことを提案している。障がい者スポーツでは、障がいを補助する道具を使い、健常者の身体に近づけるが、超人スポーツでは、健常者も障がい者も同じ器具を使用することによって、同じスポーツを実践することが目指される。超人スポーツが拓いていくのは、スポーツの新しい地平なのだろうか。近代スポーツの身体観はどのように変化するのか。次に超人スポーツ協会についてみていくこととする。

2. 超人スポーツ協会

超人スポーツ協会は、2014年10月10日に発足した超人スポーツ委員会を元に、2015年6月1日に設立された¹²⁾。ウェブサイトには、提唱者として、稲見昌彦氏（自在化技術研究、東京大学先端科学技術研究センター教授）、稲見氏とともに共同代表として、中村伊知哉氏（ポップカルチャー政策プロデューサー、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授）、暦本純一氏（拡張人間研究者ヒューマンインタフェース研究、東京大学大学院情報学環教授）の名前と肩書きが掲載されている。そのほかに、理事やメンバーには、VR（バ

ーチャルリアリティー)、ロボティクス、ウェアラブルコンピューティング、スポーツ科学、人工知能などの研究者や、メディアアーティストなどが名を連ねており、領域が多岐にわたっていることがわかる。日経コンピュータ(2014年10月10日、ウェブニュース)の記事には、設立目的として、「人間の能力を補助・拡張する技術を活用し、人と機械が融合した『人機一体』の新しいスポーツを創造」することと書かれており、「すべての参加者が楽しめる」「技術とともに進化し続ける」、「すべての観客が楽しめる」を3原則として、「超人スポーツ」とはどのようなものを、次のように説明している。

「超人スポーツ」は、いつでも、どこでも、誰もが楽しむことのできる新たなスポーツです。人間の身体能力を補綴・拡張する人間拡張工学に基づき、人の身体能力を超える力を身につけ「人を超える」、あるいは年齢や障害などの身体差により生じる「人と人のバリアを超える」、そのような超人(Superhuman)としてフィールドで競う、「人機一体」の新たなスポーツを創造します。超人スポーツの実現に必要な技術開発、プレイヤーやコミュニティの育成のみならず、自ら新たなスポーツのルールをデザインし、新しい時代に対応した競技を生み出し、スポーツ分野そのものも拡張していきます。(ウェブサイトより)

「拡張」は、超人スポーツのキーワードの一つであるが、上記3原則に基づき、次の6つのスポーツ環境を拡張することが提示されている。

- ①身体の拡張：ウェアラブルデバイスや義体化技術により人の五感や運動機能を拡張し人を超える身体能力を生み出します。
- ②道具の拡張：遠くを見渡せる装具やどんな人でも魔球を投げられる球を開発し、個人の能力差を越えスポーツの可能性を拓けます。
- ③フィールドの拡張：人の行動範囲を、陸上から空や水、さらにはバーチャルな世界にまで拡張新たなスポーツの舞台を創造します。

④トレーニングの拡張：アスリートの身体運動をあらゆる感覚情報として精緻に捉え「身体で覚える」新たなトレーニングを可能とします。

⑤プレイヤー層の拡張：老若男女、障害の有無に関わらず、すべての人が一緒にスポーツを楽しみ、人と人との垣根を超える社会を作ります。

⑥観戦の拡張：プレイヤーの体感や緊張感を数万人に同時配信、スタジアムやネットの向こう側でその体験を共有し、応援を届けます。

具体的には、「ヘッドマウントディスプレイや小型電動ヘリ、パワーアシスト、センシングなどの技術を活用しながら、怪力や空中飛行、超動体視力といった超能力を本人の能力として扱えるようにし、それらを用いた安全で楽しいスポーツ」と述べられている。稲見昌彦は同時期に現れるサイバロンとの違いを聞かれ、参加できるのが障害者だけであり、障害者を支援する技術を競うというサイバロンに対し、「超人スポーツは、障害者と健常者の区別を無くしてうまく遊ぶことができなにか」という点であると述べている¹³⁾。健常者の身体、障がい者の身体という境界をゆるがそうという試みにもなるだろう。2016年はVR元年とも呼ばれ、様々なVR機が一般家庭にも普及し始めている。これまでとは異なる身体経験も可能となっている。もちろん、現実にはまだ多くの課題がみられるだろう。さらに、この試みが、差異を越えるものなのか、あるいは身体の新たな平準化なのか、注視が必要であろう。

今後の課題

近代スポーツを問い直し、オルタナティブとしての身体運動やスポーツを作り出そうとする動きは多々ある。民族スポーツや、マーシャルアーツへの関心、ニュースポーツやレクリエーション主体の運動、また「トロプス」運動はまさに勝利至上主義からの脱却を図ったものであった。さらに近年のエクストリーム系スポーツの興隆は、規律訓練化される身体活動や、競技における危険や予測不可能性の排除、均質化した空間と既定のルー

ル支配への抵抗とも考えられる。障がい者、健常者がともに参加するアダプティッドスポーツの実践も近年広がりを見せている。競技イベントでいえば、ワールドゲームス（オリンピックには採用されていないスポーツを集めた大会）や、ゲイゲームスなどセクシャルマイノリティのための大会なども開催されている。このようなスポーツイベントの広がりや、身体の個別性を尊重する傾向であり、また多様性の認識ともいえるのではないだろうか。

近代オリンピックの標語である「より速く、より高く、より美しく」は、人間的身体は「発展」するものであり、近代スポーツはそれを肯定するものであった。だが、多様なスポーツの広がりや、人間的身体は「発展」はそもそも無条件に肯定されるのか、それを表象する近代スポーツは何を意味するのか、ということ問い直すことにも通じるのである。果たして超人スポーツが示すスポーツ観、身体観が近代スポーツのオルタナティブを提示するのかどうかはまだ未確定であるが、考える契機となっていることは間違いないであろう。

【註】

- 1) 稲垣正浩、西谷修、今福龍太『近代スポーツのミッションは終わったか』2009年、平凡社、8頁。
- 2) 田中愛「スポーツ身体論の現象学的考察ーアダプテッド・スポーツ実践に生じる『意味』としての身体に着目して」『体育・スポーツ哲学研究』38巻1号、2016年、38頁。
- 3) P.ブルデュー「どうしたらスポーツマンになれるか」栗原彬他編著『身体の政治技術』1986年、新評論。
- 4) S. B. ドゥルー『スポーツ哲学の入門ースポーツの本質と倫理的諸問題』ナカニシヤ出版、2012年、199頁。
- 5) 渡正「テクノロジーの発展とスポーツ」『現代スポーツ評論 29』2013年、54頁。
- 6) 進化するW杯サッカーボール 戦術にどう影響する？2014年06月05日、玉村治、

<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/3906?page=1>

7) 渡正「スポーツ科学の価値と未来」『現代スポーツ評論』2016年、87頁。

8) ここでは検討できないが、エンハンスメントもテクノロジーの重要な課題である。美馬によれば、「普通は健康とされる状態をさらに強化・増強するために生物医学テクノロジーを用いることは、生命倫理・医療倫理の分野では『エンハンスメント (Enhancement)』と呼ばれている」が、その境界は曖昧であるとも指摘する。例えば成長ホルモン分泌不足な子どもへの成長ホルモン投与は治療といえるが、バスケットボール選手として大成することを目指した投与はドーピングとどの様な違いがあるのか。また、認知的エンハンスメント（記憶力や注意力の増強）、抗うつ剤や類似の薬物による感情コントロールをアスリートが行うことはどのように考えるべきか、などがある。美馬達哉「正常・病理・エンハンスメント」『スポーツ社会学研究』23巻1号、2015年、9頁。また、拙稿「『特集：スポーツ・身体と科学技術のサイエンス・カフェ』特集のねらい」参照。

9) 朝日新聞、2016年7月2日「義足ジャンパーのレーム、五輪断念『時間と政治的事情』」

10) 田中、2016年。

11) 19世紀イングランドにおけるアスレティズムから誕生した近代スポーツにおいて、その身体とは、中流階級の白人男性のものであったという指摘は、スポーツのジェンダー研究・フェミニズム研究が明らかにしてきた点である。その視点からは、女性アスリート、スポーツの苦手な男性もまた「二流の選手」と見なされるとする。『スポーツ・ジェンダー学への招待』飯田貴子・井谷恵子編著、2004年、明石書店。

12) <http://superhuman-sports.org/s3/organization.php>

13) <http://www.nhk.or.jp/hearttv-blog/3400/217524.html>